

東條希が大坂弁な理由

ジョリポン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはウチが唯一恋をした人との、出会いと別れの物語。
捏造です。

短編1話完結。

目次

東條希が大阪弁な理由

1

東條希が大阪弁な理由

「希、そういえば前から思ってたんだけどなんで大阪弁なの？ 出身って東京だったわよね？」

えりちと仲良くなって数ヶ月、不意にそんな事を聞かれた。やっぱり気になっちゃうか。

「あーそれは……少し長くなるけど聞きたい？」

うんうん！ と頷くえりち。

そう期待されると断れんやんなあ。

本当はあまり話したくないんやけど……せっかくできた友達の頼み、無下にするのもアレやし仕方ない。

「うち、親が転勤族でな。昔はよく引越してたんよ……。それであれは確か小学6年生くらい、東京に引越してきた時だったかな——」

はあ。また引越し。

そして孤独な学校生活が始まる。

そう、私には友達がない。

いつからだろう。友達を作ろうとしなくなったのは。

そりゃあ最初の頃は友達作ろうと頑張ってたよ？ でもどうせまたすぐ引越すことになる。どんなに仲が良くても遠く離れてしまえば会う事もなくなる。そして残るのは寂しさだけ。

それに気付いてしまっただけから私は友達を作るのをやめた。

学校が終わり放課後。いつも帰りは寄り道をしている。早く帰っても親は仕事でないからだ。それでどこに寄り道してるかという……適当かな。でもただの散歩をしてるってわけでもない。

じやーん。

鞆からカメラを取り出す。

これはただのカメラじゃない。パパがくれたお気に入りフィルムカメラ。これで風景写真を撮ってまわってるんだ。友達なんか居なくてもこのカメラさえあれば寂しくないもんね。引越す度に色々な風景と出会えるし私にとっては最高の相棒なんだ。

その日はフィルムを使い切ったので、写真屋に現像と新しいフィルムを買いに行つた。

そして帰り道。写真屋が少し遠いところにしか無かったため、あたりは夕暮れ時になっていた。このくらいの時間帯は良い写真が撮れるかもしれない。現像した写真の入った紙袋を腕にかけ、カメラを構えつつ河原を歩いていく。その時。

「写真、とってるん？」

いきなり後ろから声をかけられた。

振り向くとそこには同じ年くらいの男の子がいた。学校では見たことない顔だからきつと他校の人だろう。

「なあ！　どんな撮ってるんかみしてや！」

そう言うや否や彼は私がついていたカメラを覗き込んできた。

「ちよ、ちよつと」

「あれ？　これよー見たらフィルムカメラやん！　珍しいなあ。て事は写真はこの紙袋ん中か！　どれどれ……おおーなかなかやるやん!!　特にこの写真！　この構図とか光の入れ具合とかめっちゃ考え」

「わかるの!?　そうなのこの写真はすごいこだわったんだ！　でも他の写真もしっかり考えて撮ったんだから！　例えばこの写真とかこの角度で飛行機と手前の……」

そんな感じである程度喋った後でハツとする。いきなり喋りすぎた。写真の話なんて同年代の人とした事なかったからついテンションが上がっちゃったみたい。いけないいけない。少し恥ずかしくなり黙ってしまう。

「………どしたん？　いきなり静かになってもうて」

「いや……いきなり喋りすぎたかなって……」

「んなこと気にせん気にせん！ 大丈夫や！ むしろめっちゃ生き生きしててよかったです!!」

「そ……そうかな……」

いきなり褒められ照れる。最初はいきなり変な人に絡まれた！ と思ったけど結構いい人なのかも。

「そーいやまだ名乗ってなかったな！ ワイは喜きらく楽 秀しゅうすけ介 ！ キミは？」

「と、東條希……です……」

「希ちゃんか！ よろしくな！」

「よ、よろしく……」

「つてああ!! もうこんな時間やん！ じゃあ続きはまた明日な！ またここで会おうな〜!!」

びゅ〜ん!

そうして彼は元来た方向に走って帰っていった。なんだったんだらう。嵐のように

来て嵐のように去っていったなあ。でもまあ、楽しかったかな……写真の話なんてパパとしかした事なかったし……

「また明日、か……」

喜楽くんが帰って行った方向を眺めながら呟く。明日もここに来たら会えるって事なのかな？

そこまで考えてハツとする。友達なんて作ったらダメなんだった！ どうせ後に待ってるのは別れと悲しみだけ。今までもそうしてきたでしょ？ そう言い聞かせその日は家に帰った。

次の日。いつも通りカメラを持って良い風景を探し歩く。昨日の約束の事は覚えていたけど行くつもりはなかった。行ってしまえばそのまま仲良くなってしまいそうだったからだ。友達なんて作らないんだから。

良い風景を探して歩く。歩く。

『おぉーなかなかやるやん!!』

『めっちゃ生き生きしててよかったで!!』

！
昨日の出来事が頭の中をちらつく。うるさい！ 昨日のときには行かないんだから

「あ、希ちや〜ん！ お〜〜い」

気がつくとは私は昨日の河原にいた。無意識に来てしまったのか偶然たどり着いてしまったのかはわからない。けど、ここまで来ていきなり帰るのもアレだし今日は仕方ないという事にして喜樂くんのところに行く。

「実はワイもカメラ持っててな……今日は写真持ってきたで！ ほら見て見て！」

そう言うと喜樂くんは鞆から沢山の写真を取り出した。

「わあああ……!! 凄い!! この写真とかこの色合いが……」

「やろ？ これな、結構撮るの大変やってん。ま、コツがあるんやけどな？ あんな

……」

「へー！ これをこうして……本当だ!! あ、こっちの写真も……」

そんな感じで私たち2人はあつという間に意気投合し、写真トークを続けた。それから私たちは毎日ここで集まって一緒に写真を撮りに行くようになった。気がつけば友達を作らないなんて信条は忘れていた。

そんなある日、私はある事を思いついた。

「秀介くん秀介くん!!」

「どした?」

「コホン、えー、ワイは東條希や!! ……どう?」

「??」

「だから……いや違う。えーと……あ! セやから、ワイは東條希や!!!」

「……ああ! 大阪弁か! いいやん似合ってるで!」

「やった!」

「あーでも希ちゃんはや女の子やからワイやなくてウチやな」

「あそつか! ということはつまり、ウチは東條希や!!」

「そうそう! なかなかやるなあ!」

「えへへ……」

本物の大阪弁使いに褒めてもらえて少し嬉しくなる。でもやっぱりいきなり使いこなすのは難しいのかも。

「でもどしたんいきなり」

「あのね、秀介くんって大阪弁でしょ？ それでなんか毎日聞いてるとなんていうんだろ、なんか……暖かい感じ？ がしてさ、好きだなあって」

「えっ!？」

「あつ違うよ！ 大阪弁の話！」

「だ、だよな！ ゴメン続けて？」

「うん、だからなんか身につけてみたくなっちゃって。それに私も……ううん、ウチも大阪弁になったら秀介くんとお揃いになるやん？ そういうのもアリかなって！」

「お……お……」

珍しく照れてるみたい。そんな反応されるとウチまで恥ずかしくなってまうやん。ちよつとの間沈黙が続く。

「自分、実は今までそんな大阪弁好きやなかったんや。なんとなく分かつてると思うけど、自分結構前に大阪から引越して来てん。でまあ当たり前やけど、大阪弁使う奴なんかこの辺でワイだけやし、学校でも結構浮いててな……けど希ちゃんにそう言つて貰えるとちよつと好きになれる気がするわ。……おおきにな!!」

そう言つて彼は満面の笑みを見せてくれた。

その表情に胸がときめく。ウチはこの数日の間に秀介くんの事が好きになつてしまつたんや。

それから数日して、ウチは告白する事にした。恋人になれたら引越しても縁が続くと思つたからや。世間には遠距離恋愛つてもあるらしいしな? そのためには早いうちにカツプル成立させて連絡先とかゲットせんとな!

そう考えながらいつもの河原に向かうけどアカンこれめつちや緊張するわもし断られたらどうしよう今の関係が崩れたらどうしようそもそもウチ秀介くんはどう思われてんやろと考えれば考えるほどどうしようもなくなつてくる。

そうこうしているうちに待ち合わせ場所に着く。が、まだ秀介くんの姿は見えんかつ

た。

珍しいなあいつもは先にいるのに。

それからかなりの時間が経ち日も暮れてくる。もう今日は来ないのかと帰ろうと思つた頃だつた。

「ごめん希ちゃん」

「秀介くんどしたん今日とても遅り……うわ！ 凄い怪我!! 何があつたん!？」

そこに来た秀介くんは足を擦り剥き鼻血を垂らしていた。よく見ると顔も腫れているかもしれない。

「いやあ何でもないんやちよつとミスつてなあはははは」

「そんなk」

「それよりごめんな今日は。もう遅うなつてもうたしました明日な」

「ちよ、ちよつと!」

そういうと秀介くんは帰っていった。

いったいどうしたんやろ。心配やん。明日来たらまた聞こう。

……あ！ 告白してなかった！ まあ今日は仕方なかったけど。

それも明日しよう。

次の日。今日もまだ秀介くんは来てないみたい。本当にどうしたんやろ。そう思いながら待つこと数分。そこにきたのは秀介くんじゃなかった。

「お、ほんとにいるー」

「よー！ 希ちゃん……だっけ?」

「結構かわいい」

柄の悪い知らない男子の集団だった。しかもウチのことを知ってる様子や。

「誰ですか？ 秀介くんの知り合いですか?」

「ああ！ むしろ友達友達、超仲いいぜ！ なあ！」

「まあなー」

「それよりこの子結構胸でかくね？」

「確かに。なあー触ってみたいなー」

「!？」

いきなり何を言いだすんこの人たち!!
そもそも友達なんて絶対嘘やろそんなの!
少し後ずさる。

「クラスのやつと比べてもトツプクラスかもな！」

「同意」

「なあーちよつとくらいいいだろー??」

「や、やめて……」

そういうなり男子達はじりじりと迫ってくる。このままだとやばい！
逃げだそうとするも腕を掴まれ阻止される。そう思って

「ちよ待てよ！」

「は、はなして！」

「ハーンびびりすぎじゃね？」

「優しく触るからさぁーなぁ??」

「それは気分」

「確かに」

「だ、誰か……!!」

助けて……秀介くん

その時だった。

「待てよー！」

制止の声が飛んできた。

みんなが一斉に振り向く。

そこに現れたのは秀介くんだった。

が。

秀介くん全然怒ってるような様子はなく。
むしろ仲良さそうに。

「始めるのはワイも来てから言うたやろ〜?」

「ふふっ、ごめ〜ん！」

「秀介……くん……??」

どういふこと……? 知り合いやなんて出まかせやと思ってたのに……
すると秀介くんは衝撃の一言を放った。

「ごめんなく希ちゃん。今までの、全部芝居やねん!!」

「おつともうこんな時間か。じゃあね〜キモキモ大阪弁野郎〜」

自分、喜樂秀介はいじめられている。

キツカケは覚えていない。きつと些細な事だったと思う。うっかり肩をぶつけたとか話しかけられたのに気付かなかつたとか。

ただ相手が悪かつた。草野^{くさの} 我樂^{がらく}。クラスの柄が悪いグループのリーダー格で、よく人を小馬鹿にしたような振る舞いをするやつや。

元々自分の大阪弁が気に障つてたらしく、それ以来ずっと事あるごとに物を隠されたり壊されたりされている。機嫌が悪い時には殴られる事もあつた。もちろん味方してくれる人なんておらんかつた。

はあ。もう学校行きたくないなあ。

親に心配かけられへんし行くけど。

そんなある日の帰り道。その日はなんとなく少し遠回りをして帰っていた。夕暮れ時の河原沿い。もうこんな時間か。そろそろ帰らなあかな。そう思いつつ、ふと河原に目を向けた時だった。

同い年くらいのかわいい女の子を見つけた。

カメラと紙袋を持って歩いている二つ結びの女の子。

「写真、撮ってるん？」

つい話しかけてしまった。

相手も驚いている。いきなり知らない人に話しかけられたらそりゃあそうだろう。

自分もなんで話しかけてしまったのかわからない。かわいだけの子なら街でたまに見かけるけど、今みたいに話しかけてしまうことはない。ただ、こんな時間にこんな場所に一人でいた目の前の彼女はなんだか寂しそうに見えた。そこに親近感を感じたからなのかもしれない。

自分も少し前まで写真を撮っていたためその話で仲良くなり、毎日いろんな場所を一緒に巡った。それらの日々は辛い事しかなかった自分の生活の中にできた唯一の楽しみだった。

そんなある日の学校。

帰りの会が終わわり下校時間になった時だった。

「お〜い秀介くーんwwww 最近学校終わった後楽しそうだよねww 何かあったの?？」

草野にバレた。

仲間を引き連れこつちにやってくる。

「今日もこれからどこか行くんでしょ？ 教えてよwww」

「なんでもない」

「そんなわけある？ 一目でわかるんだけどw 隠せてると思ってるのw？ なんかあつたんだよね?? 言葉よ」

「絶対言わへん!!!」

「はー面白くないなあ……痛い目見ないとわかんねえのかオラア!!!」

突然草野に顔面を殴られる。衝撃で倒れ足を擦り剥いた。ジンジンとした痛みが襲ってくる。最悪だ。

「なあ、教えてよ秀介くん。教えてくれないと僕の腕が止まらなくなっちゃうよ……」

「あはwあははははwww」

「草野くんそれは草」

「やってんね」

草野はそう言いながら延々と顔を殴り続けてきた。痛い。痛い。痛い。早く終わってくれ。希ちゃんが待つてるんだ。

「あれ草野くん、コイツなんかいつもと様子違うくね?」

「あれ本当だ……オイなんだよその目は! さっさと答えろよ! いつもの変な関西弁でさあ!!」

「関西弁は変じゃない!!!」

「うおっ」

カツとなり草野を突き飛ばす。関西弁は希ちゃんが褒めてくれた自分のいいところな
んや!!

「「草野くん!!」」

「つてて……テメエ……!」

草野が尻餅をついてる今なら逃げれる! これ以上希ちゃんを一人で待たせられへ

ん！ そう考えた自分は急いで走り出した。

「おい待て!! お前ら追え!!!」

草野の仲間達が追いかけてくる。このままだと追いつかれそうや。どないしよう。頭を駆け巡らせる。

そうや！ この辺りには希ちゃんとは歩き回った時に見つけた抜け道があるんやった！

曲がり角をいくつか曲がりながら抜け道を抜ける。そこから更にいくつもの角を曲がりそこにあつた路地に身を潜める。

ある程度の時が経ったが追手は見当たらん。どうやら撒いたみたいやな。

気がつくのと逃げるのに時間をかけすぎてもう夕方になっていた。やばい。早く希ちゃんのとこにいかへんと。

待ち合わせ場所に着くと遅くなったにもかかわらず、希ちゃんは待つてくれていた。そして怪我をしてた自分を見るなり驚き凄く心配してくれた。

こんなんじゃないや。いじめられているままじゃ希ちゃんに心配かけてまう。いい

加減立ち向かおう。そして平和な生活を取り戻すんや。

だが話はそうはいかなかった。

次の日の朝。学校。

「秀介く〜んww まさか女子と会ってたなんてねww よりにもよってお、お前がww」

「な……なんで……」

なぜか草野にバレていた。

「後をつけてたんだよ。撒いたつもりだったんだらうけどなく元々ここに住んでる僕らに地の利で勝てるわけないだろ！ あははははは!!」

クソ！ 一体どこから見られてたんだ!? しつかり確認したはずなのに！ 頭を抱える。そこに草野は追撃をかけてきた。

「俺は決めたぞ。お前があの子と関わり続ける限りあの子を狙う。俺に逆らってもあの子を狙う。グチャグチャのボコボコにしてやる。お前が楽しそうにしてるとムカつくんだよ!!」

嘘や。やっと楽しいと思える場所を見つけたのに。やっと久しぶりに仲のいい子ができたのに。何もかもコイツのせいでおしまいや。人質を取られてしまったてはもはや立ち向かうことすらできない。あまりのシヨックに膝から崩れ落ちる。

「……アハ、そうだよその表情だよ見たかったのは!!! あく面白い。やめてほしいならあの子と縁を切るんだね!! そうだなくじゃあ善は急げつてことで今日にしようか! さて、じゃあそろそろ席に戻ろう授業が始まっちゃうからね(へへ)」

そう言って奴は席に帰っていった。

その日の授業は少しも頭に入ってこなかった。

そして放課後。

「秀介く〜ん!!! 待ちに待った放課後だね!! さーてじゃあ早速行こうか! 彼女に別れをきき……切り出しにwwwwタハハハ!!! ちなみに今日は先に仲間を向かわせてるから昨日みたいに逃げ出して彼女を逃そうとか考えてても無駄だよww」

そんな事を言う草野に連れられいつもの河原の近くまでたどり着く。その時。

「は、はなして!」

希ちゃんの声だ。思わず駆け出す。自分なら何をされても耐えられるけど、希ちゃんに手を出されるのだけは耐えられへん。

少しすると姿が見えて来た。怯えた表情の希ちゃんとそれに群がる草野の仲間たち。

「待てよ!」

制止してハッと気付く。逆らうと希ちゃんに危害を加えられてしまう。

草野の仲間達が『わかかってんだろうな』と言うような表情でこちらを見ている。きつと今後ろにいるはずの草野も同じだろう。

この流れから希ちゃんに不審がられないように縁を切らないといけない。となると今から自分が取らないといけない行動は……

「はじめるのはワイも来てから言うたやろ〜？」

「ふふっ、ごめ〜ん！」

「秀介……くん……?？」

「こいつらの仲間を演じることや。」

「ごめんなく希ちゃん、今までの全部芝居やねん!!」

「え……」

「今までずっと騙されてたんめっちゃおもろかったわ！ はっはっは!!」

希ちゃんの顔がシヨックに染まる。

「ごめん、希ちゃん。でもこうするしかないんや。もし不自然と思われて立ち向かわれたら希ちゃんまでターゲットにされるかもしれないへん。」

「な……何言ってるん秀介くん……そうや！ きつとこの人達に脅されてるんやろ？ 昨日のケガはその時にできたもので」

「それは前の標的に抵抗されたせいや！ 前から一人でうろついてるやつに取り入って油断させてから襲うつてのをやっててな？ 嘘やったつて明かした時の反応がマジ笑けてな!! まあ昨日は失敗したんやけどな」

「そんな嘘や！」

希ちゃんは絶対信じたくないらしく大声を張り上げた。

「あの時間は全部嘘だったん？ いきなり声かけてウチの写真褒めてくれたことも？」

「嘘や」

違う。あの写真もキミのお喋りなところも全部好きやった。

「いろんな写真見せてくれて色んなところ一緒にまわったのも？」

「嘘や」

違う。あの日々は今までの辛い生活の中で唯一の楽しみやった。

「ウチが大阪弁真似するって言うた時のあの笑顔も？」

「そうや！ 全部嘘や！ あの川原でのこともカメラの事もみんな…こうして油断させて近付くための嘘だったんや!!」

違う。あの時は本当に嬉しかった。今まで嫌いだった大阪弁をキミは初めて認めてくれた。自分はキミに救われたんや。

これ以上長引かせても辛いだけだ。希ちゃんも、自分も。

なかなか諦めてくれへん希ちゃんにここで最後のダメ押しを。

「そもそも写真とかくだらへん。話し合わせるために少し調べたりしたけどな、こんなんやるやつ正直気持ち悪いわ!!」

「そん………な………」

ストレートなその言葉に彼女の顔が歪む。

「信じてたのに……！」

そう言い残し、希ちゃんは走り去っていった。

ごめん。希ちゃん。こうするしかなかったんや。

自分から離れていく背中を眺めつつ、頭の中でひたすら謝り続ける。

最後まで言えなかったけど

最初一目見た時から僕は

君の事が好きだったんだよ——

なんでこんな事になっちゃったの……？

わからない。もう何もわからない。溢れる涙を拭いながら走る。走る。走る。

家に着くと親から引越しの話が伝えられた。急な話やけど明日引越す事が決まったらしい。

それ以降、ウチは彼と会うことはなかった。

「もうこんなことは忘れよう思って、そのカメラは物置の奥深くに封印したんや」
「でもな……このなまりだけは治せへんでな……」

そこまで言って視界が歪む。

あれ……なんで涙が……

もう秀介くんの事なんか嫌いなのに……

「う……うあ……ああああああ」ポロポロ

これは。

これはウチが唯一恋をした人との、出会いと別れの物語。
それ以上でもそれ以下でもない、ただの昔のお話や。